

令和5年度 府中町立府中中央小学校 学校自己評価表【中間評価】

学校教育目標	自ら伸びる 「問い直し」を大切に、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション ビジョン	「学校は子どもが育つ土壌である」 （自ら伸びる意思の形成をなす土壌） 【使命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の業務の充実と研鑽に励む
--------	---	-----------------------	---

ビジョン（中期経営目標） 実現に向けての現状（進捗状況）と今年度の位置付け	<p>昨年度は、「問い直し」をキーワードに、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく教育活動を創造してきた。そうした中、個々によって山の高低は異なり、登り方も一律ではないと感じた。授業づくりにおいても、どの学級も授業として成立しているものの「一斉授業の形態が多いのではないか」「提供されるだけの授業では児童は面白くないのではないか」などの意見が教職員の中から出てきた。また、配慮を要する児童の姿から、「自ら伸びる意思」は、個の活動によってのみ育っていくものではなく、集団の中で他者と協働しながら共に育っていくものであり、個の育ちと集団の育ちは別物ではなく、問い直したり変容したりと動きながら主体形成をしていくことを再認識した。</p> <p>今実践している教育活動が「子どもが育つ土壌を耕すことになっているか」問い直したとき、本校として価値をおくべきことは、他者と協働しながら、問い直したり変容したりと、動きながら主体形成をしていくことと考えた。</p> <p>これらのことから、今年度は、一つ一つの機会を安易に消化することなく、「はちの子の心得」や「じまんの俳句」を媒介に問い直しながら、「生きた言葉」を生み出す活動を積み上げて、児童自身がめざすべき山を創り、他者と協働しながら「群れ」から「集団」へと成熟していく過程を大切にしていく。</p> <p>また、「問い直しのサイクル（学びの型）」を回しながら、集団の成熟とともに個の成長の自覚があるかを問うていき、「自ら伸びる」意思を形成していく大きな原動力となる「創る楽しさを味わう授業や行事」を創造していく。</p> <p>そのためにも、児童と担任が共に学び合う文化を創っていく学級は、「自ら伸びる意思の形成をなす土壌」でなければならないことから、今年度の学校経営の第一の柱は「a『生きた言葉』が生まれる学級・学年経営」とする。</p>
--	---

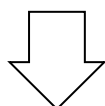
学校経営の柱に係る考え方

a 「生きた言葉」が生まれる学級・学年経営 (学級経営力)	学級・学年づくりを「自ら伸びる意思」の形成につなげるには、「生きた言葉」が集団の成熟を生み出しているかどうかを問うていくことが大切である。「はちの子の心得」や「じまんの俳句」によって「生きた言葉」で語ろうとする児童に、教師が熱を感じながら価値付けていくことで、学級の山場が創られていくと考える。
b 「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり (教師の授業力)	学びの創造を「自ら伸びる意思」の形成につなげるためには、創る楽しさを味わう授業かどうか問うていくことが大切である。「問い直しのサイクル」を回しながら、教師が「教えること」を少しずつ手放し、児童が自己決定しながら自己有用感を得ることで、学びの楽しさが創られていくと考える。
c 自己認識を問い直す行事づくり (児童自治)	行事の創造を「自ら伸びる意思」の形成につなげるためには、学級づくりと授業づくりで得た力が発揮されているかどうか問うていくことが大切である。各種活動（係・当番）や行事を自らの殻をやぶり自らを成長させていく山場ととらえる高学年の姿が低学年のあこがれとなり、学校文化を創造していくと考える。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり (地域との協働)	「自ら伸びる意思」を形成する環境を創造するためには、「わが子」だけでなく、「わが子たち」をみていく保護者を増やすことが大切であると考え。コミュニティ・スクール活動を通して、保護者を含めた地域の方が教育活動に参画しながら、学校と地域をかき混ぜていくことが「子どもが育つ土壌をつくる」ことにつながると考える。

評価計画（中期経営目標を設定して2年目）

A 中期（3年間）経営目標	B 短期（今年度）経営目標	C 目標達成のための方策	主な成熟度	現状	D 評価指標	目標値（%）	E 評価結果			
							10月		2月	
							達成値	評価	達成値	評価
a 経る「生きた言葉」が生まれる学級・学年	る児童と教師が共に学び合う文化を創る。	「はちの子の心得」 2ヶ月ごとに個と集団の姿を問い直しながら、児童と教師が共に学び合う文化を創る。	4段階	児童も教師も意思をもち、「生きた言葉」を交流しながら問い直すことで新たな山場が創られていく学級。	○	80%	86.8%	A		
			3段階	児童が事実目に向けながら「生きた言葉」を生み出し、教師はその熱を感じ取って価値付けを重ねている学級。						
			2段階	「生きた言葉」で語ろうとしている児童を教師が大切にしている学級。						
			1段階	児童同士がつるむなど個人の意思がなく、集団の課題を見過ごしている学級。						
b 推進「問い直しのサイクル」の構築を研究する	る授業者自己決定と自己有用感の研究	・年7回の公開授業や示範授業による相互参観を通して授業力を高める。 ・協働学習と自由進度学習等を効果的に往還させた授業づくりを研究する。 ・一部教科担任制導入により教材研究の時間を確保する。	4段階	児童が学び方を調整・選択しながら自分のタイミングで問い直しを重ね、次の学習や生活に生かしていく授業（自ら学びを創っている授業）	6年	90%	89.3%	A		
			3段階	教師が「教えること」を少しずつ手放し、児童が自分の思いや考えを自由に表現できる授業（教師が児童に学びを託す授業）						
			2段階	児童の意欲を喚起する教材で授業に驚きをもたせ、児童相互が問いを深めている授業（教師の思いがある授業）						
			1段階	教師の発問によって児童が答えを探し出している授業（教科書に沿った授業）						
c 自己認識を問い直す行事	する高学年のふるま行事を低学年	・係活動、当番活動等を通して暮らしの主体者となる経験を重ねる。 ・たてわり活動（異年齢交流）を通してリーダーを育成するとともに人と関わる喜びを経験する。 ・児童会主催「はちの子 meet」など、中学校の自治活動につながる児童会行事を創る。	4段階	各種活動（係・当番）や行事を自らの殻をやぶり自らを成長させていく山場ととらえ、次の活動に生かしている。	○	85%	77.5%	B		
			3段階	各種活動（係・当番）や行事において自分の強みや弱みを認識し、自ら選択した役割をやり遂げている。						
			2段階	各種活動（係・当番）や行事において相手の気持ちや立場を理解し、協力して参加している。						
			1段階	各種活動（係・当番）や行事にまじめに参加している。						
d 児童や大人の集いが充	活動の充実を図る。スクール	・「いつでも参観日」など日常的に児童の様子や教育活動を知っていただく機会をつくることで学校の応援団を増やしていく。 ・コミュニティ・スクール活動を中学校区で交流し、取組を共有する。 ・地域と連携したカリキュラム・マネジメントを推進する。	4段階	地域と学校が対話をしながら、持続可能な取組を創っていくとする状態。	○	85%	92.3%	A		
			3段階	「自分に何かできることはないか」と当事者意識をもち、楽しく活動に参画している状態。						
			2段階	各種たよりを見てサポーター活動に参加するなど、学校の様子を直接見ている状態。						
			1段階	各種たより等が発信されるが、保護者や地域は学校の様子を外から見ている状態。						

評価基準… A：目標達成（95%～100%） B：おおむね達成（80%～94%） C：もう少し（60%～79%） D：できていない（59%以下）
目標値を100%として、達成率を計算する。「例 目標値85%→アンケート結果92% →目標値を超えているので評価はA



F 結果の分析・解釈・変容（中間 10月）

<p>a</p> <p>○昨年度から取り組んできた「はちの子の心得」が定着し、4月のスタートから学年・学級で問い直しを行いながら意識統一して進めることができた。</p> <p>○どの学級も毎日帰りの会で振り返りを行い、次に生かしていこうとする姿勢が、学級集団における適応感の向上に繋がっていると考えられる。</p> <p>●「学校楽しいと」の結果は、目標値を超えているが、高学年になるにつれてやや低くなっている傾向がみられる。また、同じ学年でも学級によって数値にばらつきがある。</p> <p>●個人で振り返りをしてきた教師の成熟度を学年で分析した結果、4段階のうち3段階が1年と5年、他の学年は2段階であった。</p> <p>○「じまんのはいく」の自由投句は前回の達成率を大きく上回り、投句した人数は643人、投句数は2102句になった。</p> <p>「自由投句」は、「いつでも誰でも何度でも」を合言葉に今年度より取り組んでいるが、1回目は興味関心の高い一部の児童が一人で数多く投句するものの、期間中に一度も投句しない児童も多数いるという実態であった。そこで2回目は、投句状況の中間報告を発表し、俳句を作りたくなるような環境（風土）作りの工夫や児童への働きかけなど、学級担任への指導を促し、児童の創作意欲が高まるように工夫した。それによって、投句総数だけでなく投句する児童数も大きく伸びた。また、投句ポストを学年廊下に設置し、2学期より継続して取り組んでいる4学年、野外活動でのさまざまな活動の度に振り返りを俳句で表現させた5学年など、学年ごとの実践例も拡がりを見せている。</p>	<p>b</p> <p>○5年・6年・3年で公開授業を行った。国語の説明文では、各学年で身に付けたい力やめざす児童の姿や表現力について考えることができた。自由進度学習（2学期からマイプラン学習と名称変更）では、自己決定と自己調整、自己表現をいつ、どこで、どんな形で発揮させ、見とるかということについて考えることができた。</p> <p>○夏季休業中の研修では、教師自身の課題意識や参画意識が高まるよう、グループ分け（全員が語れるよう少人数グループにする・ラウンドスタディを取り入れる・経験年数によりグループを分ける・役割を持たせるなど）や進行役などを工夫し、一人ひとりが授業を創る意識、つまり「自ら伸びる意思」の高揚をねらった。</p> <p>●国語科説明文において、各学年でつける力を意識した日々の授業になっているか。</p> <p>●自由進度学習（マイプラン学習）において、各学年の取組をどのように共有するか。</p>	<p>c</p> <p>○低中学年は、意欲的に当番・係活動に取り組んでいる。高学年は、各行事等で実行委員を募り、取り組んでいる。6年生では、学年当初に「どんな学年集団にしたいか」と学年集会で働きかけ、各学級で話し合い、「思いやりの心をもつ」「相手と分かり合う言葉かけをする」等の目標を掲げ、その目標に向かって懸命に取り組んでいる。1年との仲良し遠足や給食配膳の手伝い、ペア掃除等の際には、1年生に話しかける言葉（特に語尾）に気を付けながら話しかけていた。5年生も、運動会や野外活動に向けて実行委員を立ち上げ、自分達の言葉でめあてを決め、生きた言葉で振り返りを語ることができた。みんなの前で言葉を発する機会が増えてきている。</p> <p>●特に5年生では、意欲的に取り組む児童が出てきている反面、そうではない児童との差が目立ってきている。</p> <p>●高学年は、自分の弱みに気付いている児童が多い。それを受け入れながら前に進めるようにしていきたい。</p> <p>○今年度は、縦割り活動を再開し、7月から縦割り掃除、9月から縦割り遊びを始めた。9月に入ってようやく軌道に乗り始めた。高学年は、リーダーとして困っていることをどうするか、学級でも話し合いながら進めている。縦割り掃除や縦割り遊びで、異学年の交流もでき始めたところである。</p> <p>○教科担任制によって、児童の様子を複数の教員で見とることができた。気になる児童やトラブルが起こった時に、複数の教員で取り組むことができていく。</p> <p>○「はちの子 meet」や児童会行事を、執行部を中心として児童自らが考え、実行することができている。</p> <p>○今年度は、クラブ活動の担当として、教員だけでなくゲストティーチャー（地域の方）を招き、運営にも協力していただき、クラブ活動の種類も増え、より楽しく豊かにすることができている。</p>	<p>d</p> <p>○今年度は、参観日後に学級懇談会を設けた。1回目は、担任や学級の様子、学級経営に関心をもち参加する保護者が多かった。2回目では、「学校楽しい～」を活用し、集団としての分析とともに個々の学校適応感について説明を行った。懇談会を設けることでより、子どもの様子が分かり、安心感に繋がっていると考えられる。</p> <p>●一方で、特別な仕掛けがないと出席者が増えない課題がある。</p> <p>○サポーター活動の参加者が確実に増加している。それに伴ってCS活動に理解を示す教職員や児童、保護者も増えている。教職員に対するCS研修や保護者が自分の得意なことを生かして気軽に参加できる活動（環境活動、授業サポート）などの成果である。また、学校では、児童が安心して校外学習に参加したり、授業を受けたりする様子が見られる。サポーターが学校にいることが日常となり、児童とサポーターがお互いに声かけをするなど関わりが増えている。この活動を中学校区及び地域と交流し、共有することによって学校の現状を知ってもらう機会が増えている。</p> <p>○校区連絡協議会や地域活動養成講座の交流などにより、地域の人脈づくりも増え、幅広い知見のもと地域で子ども達を育てる意識の出発点となっている。</p> <p>●CSの一員として我が子だけではなく中央小の児童のために何かできることはないかと考えている。77.3%と保護者アンケートの数値の伸びが高まらない。</p>
---	---	---	---

G 改善方策案

<p>a</p> <p>○「はちの子の心得」は、学校行事や学年の学習内容、また学級の実態に応じて、2か月ごとに限定せず、常に問い直し、個人と集団での振り返りと評価を行っていく。また学年や学級の掲示板を活用し、伸びを視覚化して価値づけを行い、適応感の向上につなげていく。</p> <p>○学年の分析した教師の見取りや今後の取組が、適応感の向上に繋がるよう指導部会や全体で情報を共有し進めていく。</p> <p>○「じまんのはいく」では、自由投句において優秀作品を紹介するだけでなく、数多く投句した児童や学級を紹介して評価し、意欲関心を高める。また、数だけでなく「質」も向上させるための手立てとして、「俳句ミニ講座（仮）」を開き、改善するためのアドバイスをするなど個別指導の機会を設ける。</p> <p>自由投句以外の俳句作りにおいても、指導資料を準備したり優れた作品を紹介したりして、学級担任の指導の一助となるようにする。</p> <p>○学年朝会やことば朝会など、朝タイムや朝会の在り方を検討し、表現力を高める場を設定する。</p>	<p>b</p> <p>○国語科においては、児童の実態とつける力を把握して、自己決定と自己表現につなげる授業改善を進める。</p> <p>○マイプラン学習においては、自己選択、自己決定、自己表現、メタ認知をする場面とその見取りについて指導部会で共有し、学年に広げていく。</p> <p>また、児童の学びを見とる方法として、座席表の活用についてミドルリーダーを中心に研修を深める。</p> <p>○今後の全体研修（1年・2年・4年・ここにこ学級）では、個別最適な学びをすすめるため、特別支援学級担任や特別支援COに事前に児童の見取りや支援の在り方について相談し、授業を創っていく。</p>	<p>c</p> <p>○日々の縦割り掃除や、はちの子デー等の縦割り活動、その他の学校活動で見かけた、児童の頑張っている姿や優しい姿を、名前を呼んで肯定的評価をしていくようにする。また、その児童の担任に、名前と様子を伝えて、担任からも価値づけていく。</p> <p>○縦割り班の担当とリーダーで連携を取りながら、縦割り活動がうまくいくようにアドバイスをする。</p> <p>○高学年は、意図的に学年集会を取り入れ、児童主体で進めていくことで自治的能力や大勢の前で躊躇なく話す力を高める。</p> <p>○スクールサポーターの方々が、縦割り掃除の時間に一緒に活動し、子供達を見守ったり、掃除の仕方に声をかけたりしてくださっている。そのため、スクールサポーターの方々と連携していき、効果的に活動できるようにしていく。</p>	<p>d</p> <p>○学年主任会で学級懇談会の在り方（内容・進め方）を話し合い、さらに学年部で方向性を検討する。特に個が集団との関わりの中で育てていることを保護者が実感できるようにする。我が子だけではなく我が子たちを育てているという意識に繋がれるような懇談会を創造する。</p> <p>○CSカリマネの説明会やサポーターリーダー研修会を推進するなど、機会の場や研修内容をCS事務局と共に企画・運営を重ねていく。また、CS活動後にアンケートを実施し、活動内容や自由意見など参画された方々の思いを大切にしたり参考にしたりして新しい活動を創造する。</p> <p>○地域の行事に足を運び、地域との繋がりを深める。CSと地域と学校が互いにできることを行いながら行事を創っていくことで協働できる土台づくりを行っていく。</p>
<p>学校の大きな方向性に照らして、 ・授業づくりについては、年度当初は協働学習と自由進度学習の往還を考えたが、研究が進むにつれ協働学習と自由進度学習は全く違ったスタイルの授業ではないのかと考えれば授業現場に繋がる授業としていかなければならないと考えた。そのためには、学力調査の結果、児童一人一人の実態と教科の特質に即したつけさせたい力を把握した上で授業の在り方を探っていく必要がある。</p> <p>・「はちの子の心得」「じまんのはいく」の取組や高学年で実行委員形式を取り入れた学校行事・学年行事の取組やこれら取組における教師の価値づけにより、児童は自分の伸びだけなく、集団としていく中で児童同士の間で育つ機会が増えている。しかし、家庭では、我が子が様々な関わりをもち集団の中で育っていることを実感できにくい。我が子だけにない。我が子が育つ中で育っていることと協働する仕組みを整え、大人の学習機会となるような活動を展開していきたい。</p>			

